報告事項ケ

令和元年度鳥取県英語教育推進フォーラムの概要について

令和元年度鳥取県英語教育推進フォーラムの概要について、別紙のとおり報告します。

令和元年１２月２０日

鳥取県教育委員会教育長　山　本　仁　志

令和元年度鳥取県英語教育推進フォーラムの概要について

令和元年１２月２０日
高　等　学　校　課

小・中・高校の外国語科・英語科教員が一堂に会し、授業改善に熱心に取り組んでいる県内小・中・高校の先生方による実践発表や外部有識者による講演をとおして、異校種が連携した英語教育体制づくりや教員の指導力向上を図る「英語教育推進フォーラム」を開催しました。「鳥取県の英語教育をどうしていくかについて異校種間で建設的な意見交換ができた」「実践発表及び講演会をとおして、学びの本質に迫る研修ができた」等、小中高校の連携を推進するうえで有意義な研修であったとの感想が、参加された先生方から多数寄せられました。

１　概要について

日　時　令和元年１１月２５日（月）午前１０時～午後４時３０分

対象者　県立高等学校英語教員（各校から１名以上）
県内公立私立小・中学校、義務教育学校、特別支援学校の参加を希望する教員
（参加者合計７７名）

主　題　「達成目標から逆算して設計する授業づくり（授業中の言語活動の活用と充実）」

内　容　研究・実践発表①　湯梨浜町立東郷小学校　松本　真　教諭
習った表現を駆使して、児童が自分のことや身の回りのことについて英語でやり取りする活動を小学校の授業に効果的に導入する実践について

研究・実践発表

研究・実践発表②　倉吉市立東中学校　山根　晃治　教諭
外部試験受験をとおして生徒に動機づけを図るとともに、その結果を活用し、話す活動を中心に生徒の英語力を伸ばす実践について

研究・実践発表③　米子東高等学校　景山　浩之　教諭
社会的な問題を取り扱い、生徒の興味関心や課題意識を引き上げながら、英語４技能を効果的に統合する言語活動の実践について

講演・ワークショップ　東京家政大学教授　太田　洋　氏
児童生徒の学びの到達段階を見極めた指導のあり方と、スモールトークを軸にした言語活動や効果的なフィードバックの方法について、ワークショップを取り入れた参加型の講演

感　想
・小中高の縦のつながりが大変よくわかりました。「連携」を意識して研修を何度か受けてきましたが、実践がこのようにつながっていく、という実感を得られる貴重な研修でした。（中学校教員）

・小中高と系統的な学びを意識できて、大変有意義な学びの場となりました。自校に戻って、他の先生方にも伝達することをとおして、最後に太田先生が強調された全校・全教職員で学校全体に、新たな英語教　育の流れを共有して実践に当たりたいです。
（小学校教員）

意見を交わす参加者

２　外部有識者による本フォーラムの講評及び意義について

山岡　憲史　教授（立命館大学教育開発推進機構）

・テーマに基づき、生徒が能動的に取り組んでいける状況や場面を設定しながら、４技能をちりばめた言語活動を仕組んでいきたい。
・鳥取県の英語教育にとって画期的な一日。小中高の先生が、腹を割ってじっくり話す機会が持てたことは特筆すべき出来事だ。

巽　徹　教授（岐阜大学教育学部）

・既習というのは教師側の思い込みであるケースが多い。児童生徒に何度も繰り返させ、英語を使って「もがく経験」を積ませることが、英語を使える土台となる。
・映像の持つ教育力は絶大。県教育委員会の学習支援サイトに好指導事例等をアップし、全県的に共有することで小中高一貫した英語教育の更なる推進を。

太田　洋　教授（東京家政大学人文学部）

・小中高連携ができた姿とは「小（中）でやったことが、中（高）で生きている。」と生徒が感じたときである。「教える前に引き出してみる」という教え方に挑戦を。
・県教育委員会の主催で、小中高校教員が一堂に会して一貫性のある英語教育について検討しあう研修会は全国でも稀。ぜひ継続を。

３　参加者感想

（１）　小学校実践発表について

・実践の中から、児童の様子を見とり、その課題に対して授業を改善していかれた今回の実践は、授業研究の本来の姿だと思い、大変納得できました。小学校の実践から学ぶ機会を持てて、大変貴重な時間でした。（中学校教員）
・子どもたちがもっと話したくなるような心が動くテーマ設定が必要とのことだったが、高校現場でもそれを感じている。英語で会話するのが楽しい子たちを中高で減らしてはいけない。（高等学校教員）

（２）　中学校実践発表について

・中学校以降で内容伝達重視のやりとりを授業で取り組むためには、小学校段階で、人に伝えて分かってもらえることの喜び、人とかかわることが楽しいと実感することなどの経験を多く積み、中学校へ送り出す必要があると思った。他教科とも連携して、コミュニケーションをとるための素地を身につけさせるという意識を持って日々の実践を行っていきたい。（小学校教員）
・外部試験を意識した取り組みが学校の中でしっかり設定できているなと感じた。授業の様子も生徒は楽しそうに参加できていたし、下位・中位の子でも英語を発信できていたので、日頃からの手厚い指導が垣間見えてきました。（高等学校教員）

（３）　高等学校実践発表について

・小学校３年生から学習を始め、10 年間をとおしてどのような姿になっているのかが分かり、良かったです。子どもたちが英語を学ぶ意欲を高め、将来は仕事などに活かすことができるような力を身に付けられたらすてきだと思いました。英語が好きな児童を育成したいです。（小学校教員）
・1 つの授業の中でも一貫した内容で、かつ 4 技能統合が実現されているという点は大変感動いたしました。生徒が生き生きと聞いて話して読んで書く姿に自分の生徒がつながっていくよう、日々の教材・授業研究を先を見据えて行いたいと思います。（中学校教員）

４　参考資料（別添）

参考資料１　令和元年度鳥取県英語教育推進フォーラム　新聞記事（山陰中央新報、新日本海新聞）
参考資料２　「英語教育」2019 年度４月号　掲載記事（小中高でつながる「鳥取県英語教委育推進会議」）

参考資料 1

11/26 山陰中央新報

「表現できる」力培う改革に

小学校に20年度、英語教科導入

倉吉 「教育」考えるフォーラム

2020年度の小学校英語教科導入など英語教育改革を考えるフォーラムが25日、倉吉市内であった。県内の小中高校3校の教諭が取り組みを発表。20年度大学入学共通テストでの英語民間検定試験は先送りとなったものの、参加した教員たちは、知識だけでなく表現できる英語力を培う改革推進に意を新たにした。（桝井映志）

イラストを見て英語で説明する授業について紹介する山根晃治教諭（奥）

米子東高校の景山浩之教諭は、生徒が英文を読んで内容を別の生徒に英語で伝え、聞いた生徒が英文にまとめる授業に言及。教員に指摘されるのではなく生徒自らが誤りに気付くことを重視し、読み返すよう促す工夫も挙げた。民間試験先送りについて「ショックで複雑な思い」と戸惑いを口にする一方で「4技能を育てることが子どもたちの将来につながる」と訴えた。

開会あいさつで県教育委員会高等学校課の酒井信彦課長も、単に試験のためでなく子どもたちは学んだ英語を使いたい気持ちがあるとし「児童生徒が授業に何を期待するか、考えることが大事だ」と実践的な英語教育の必要性を説いた。

このほか発表で、湯梨浜町立東郷小学校の松本真教諭は、児童が2人一組になって英語で対話した後、組む相手を変え、先の相手の話を後の相手に伝える授業を説明。倉吉市立東中学校の山根晃治教諭は、生徒がイラストを見て英語で内容を説明する授業を紹介した。

フォーラムは県教委が開催。県内の小中高校の教員ら約70人が聴いた。

11/26 新日本海新聞

英語教育の連携について意見交換する参加者ら＝25日、倉吉未来中心

英語教育 どう連携

倉吉 小中高教員ら意見交換

小中高の英語教員らが教育体制や指導法について話し合う英語教育推進フォーラムが25日、倉吉未来中心で行われた。代表校による実践発表やワークショップがあり、教員らが異校種に求めることや自校で取り組んでいる事例などについて意見交換。英語教育の発展のため小中高の間でどう連携していくかを探った。

約90人が参加。実践発表では多くの学校が取り入れている対話活動「スモールトーク」の効果的な活用法や、環境問題への意見を文章で表現する力を付ける指導法などを報告。東京家政大人文学部英語コミュニケーション学科の太田洋教授が「小学校の学びを中高につなげる授業づくり」をテーマにワークショップを実施。参加者らは小中高で3～4人のグループを作り、自校の取り組みや異校種への要望をやりとりした。

中学教諭からは「技能ではなく意識の差があるので、小学校で話すことへの抵抗感をなくすことが必要」、高校教諭からは「社会で求められる英語力と自分の考えが表現できる力を付けさせたい」などの意見が出された。

（田中美千留）

県教育委員会が継続的にサポート
小中高でつながる「鳥取県英語教育推進会議」

福島卓也
Fukushima Takuya
（鳥取県教育委員会高等学校課英語教育推進室長）

小中高教員が一堂に会した場での「生の声」

「中学校教員として，小学校でこんなに楽しく学んでいる姿を，中学校の英語学習でも見られるようにしていかねば，と思った。」（中学校教諭）

「すべての校種の先生方がおられ，意見交換ができたことがとても有意義でした。」（高校教諭）

これらは，平成30（2018）年11月6日（火）に鳥取県教育委員会が主催した「鳥取県英語教育推進フォーラム」に参加された先生方の感想です。本稿では，県教育委員会の継続的サポートにより，県内で外国語活動や英語をご担当の小中高の先生方を繋ぎ，小中高一貫した英語教育の推進を目指す鳥取県の取組について紹介させていただきます。

県教育委員会「英語教育推進室」の立ち上げ

鳥取県教育委員会は，平成25（2013）年度，グローバル化に対応した英語教育の充実・人材育成を目指し，小中高一貫した見通しを持った英語教育を推進するために，高等学校課内に「英語教育推進室」を立ち上げました。授業力の向上，小中高を通じた指標の検討，そして英語力実践の場の創出等をそのキーワードに，鳥取県の子どもたちの英語力向上に取り組んでいます。

平成30年度の取組として，新学習指導要領による小学校外国語の導入を見すえ，学校だけでなく，家庭でも親子で英語に慣れ親しんでもらえるよう，「英語でわくわく日めくりカレンダー」を制作し，鳥取県内の公立小学校と特別支援学校の小学3年生に該当する児童に配布しました。

「英語でわくわく
日めくりカレンダー」

A5判卓上型で壁掛けにもなるこのカレンダーは，児童が日常で使用する会話を中心に内容を構成し，小学校3年生教材 *Let's Try! 1* に登場する表現をふんだんに盛り込みました。直観的に意味が伝わるようなイラストを重視し，ふるさとについても英語で紹介できるよう，鳥取砂丘や大山（だいせん）等に関する情報も取り入れました。さらに，県内ALTの協力も得て，すべての英文や英単語にQRコードで音声を聞けるよう配慮しました。

「鳥取県英語教育推進会議」の取組

英語教育推進室の発足に伴い，平成25年度，鳥取県教育委員会は次のような「鳥取県英語教育推進会議」をスタートさせました。

> 目的：初等中等教育段階からグローバル化に対応した英語教育改革を進めるために，外部有識者の助言を得ながら，目標，内容，指導法等について先導的に研究する実践に対して，専門的見地から検討を行い，県内の学校に周知する。
> 構成：外部有識者（大学教授）2名，小・中・高等学校現場教員各3名，鳥取県教育委員会高等学校課英語教育推進室（4名）
> 開催：年4回（うち1回は「英語教育推進フォーラム」（後述））

⑴ 平成29年度～30年度の取組と目標

2020年度からの小学校外国語活動の導入も見すえ，平成29（2017）年度～30年度の会議テーマを「やり取りを中心とした言語活動及び教師からの効果的なフィードバック」に設定しました。そこで，「英語好きの児童をもっと増やしたい」「4技能のバランスの取れた授業実践に取り組んでいる」など，日頃から精力的に取り組んでいらっしゃる県内公立校の先生方に集まっていただきました。会議では，実践とその背景にある理念や考え方等を紹介・共有いただくとともに，鳥取県全体として推進すべき指導モデルとはどんなものかについて協議を重ねてきています。

この会議成果を県内に普及還元するため，私達が目指すべき目標や取組の方向性を明確にし，今後鳥取県が目指す英語教育のあり方について具体的に提案する「鳥取県版指導事例集（DVD）」の制作に着手しています。外部有識者の監修を得て，小中高等学校における効果的な取組をDVDにまとめ，県内の全小中高等学校に提供し，校内研修等に活用いただくことを目標にしています。

⑵ 指導事例集制作に向けた具体的な活動内容

鳥取県版指導事例集DVDでは，英語教育推進会議現場委員9名の先生方に実際にそのモデルを示していただくことにしました。「日頃の指導を少し工夫するだけで，こんなにも活発な言語活動が展開できるんだ」「これなら自分にもすぐに取り組めそうだ」というポイント等を具体的にお示しし，現場の先生方と一緒に鳥取県の英語教育を推進していきたいと考えています。

このため，英語教育推進会議の開催にあたっては，毎回，現場委員の先生方に日頃の授業の様子を動画に収めていただくよう依頼しました。会議当日は，校種別にグループを形成し，その動画を互見します。客観的にそれぞれの先生方の強みや特徴を抽出し，県内に普及還元すべき指導実践等を精査します。あわせて，事前に動画をチェックしていただいた外部有識者から，先生方の授業を改善するために具体的な指導を受けます。

こうすることで，現場委員の先生方の指導力向上に資するだけでなく，校種別の指導強化ポイントについて，先生方のご勤務エリアに広く還元していただくことも可能になると考えています。

「英語教育推進フォーラム」で成果還元

このフォーラムは，英語教育推進会議における議論等の成果を鳥取県内の先生方に広く還元するために，年に1回開催するものです。対象は，外国語や英語を担当されている県内全小中高等学校の先生方。すべての校種の先生方に一堂に会していただき，CAN-DOリストを活用した授業や評価の改善，より充実した内容のやり取りを行う言語活動等についての実践発表や基調講演等をとおして，4技能統合型の指導改善を小中高で推進する機運を高めることを目指しています。

授業動画を見ながら
指導を分析検討

平成30年度のテーマは「小中高の連携・接続を見通した指導のあり方」。講演会講師には，本誌でもおなじみの東京家政大学の太田洋先生をお招きし，県内の小中高等学校から約90名の先生方にお集まりいただいての開催となりました。

実践発表では，英語教育推進会議現場委員の先生方から校種別に1名ずつ，推進会議にて活用している動画やデータ等を用いて，日頃の実践や児童生徒の変容について具体的に報告いただきました。ALTからの質問に児童が習った英語を駆使してやり取りする小学校パフォーマンステストの様子，30秒話すのが精いっぱいだったのが約半年後には2分以上英語で発表できるようになった中学生の成長ぶり，ALTとの対面式パフォーマンステストで即興的なやり取りに取り組む高校生の奮闘ぶり等，学ぶところがたくさんありました。

この後，外部有識者としてご指導いただいている立命館大学の山岡憲史先生と岐阜大学の巽徹先生に，発表なさった先生方の実践を分析していただきました。太田先生には，児童生徒にとってオーセンティックなタスクを設定する意義と重要性について，ワークショップ形式で小中高の先生が一緒に学びを深める時間をご提供いただきました。

今後の展望

小学校外国語活動全面実施への不安軽減や中・高等学校の定期考査改善も含めた指導と評価の一体化など，取り組むべき課題は山積しています。それでも，これらの課題克服に果敢に向かおうという熱い思いを持った先生が，鳥取県にもたくさんいらっしゃいます。私たち県教育委員会が，そうした先生方の思いを繋ぐ「小中高連携のハブ」として，サポート体制を強化しながら，英語を学ぶ面白さや醍醐味を知り，使える英語力を習得できる児童生徒の育成に邁進したいと考えています。